
コトバノ魔力

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「トバノ魔力

【ZPDF】

20926

【作者名】

空

【あらすじ】

『口にしたトバには、魔力が宿るんだよ』

だから人を傷つけるような言葉を気軽に言つてはいけない、と。まだまだ幼かった頃、祖母が自分に言つてくれていたのを今更思い出した。

何気ない日常。

『アイツ』がくるまでは、そんな日常の中だった。

こいつが、非日常になってしまったのだね。

(前書き)

この作品には「同性愛」の内容が含まれておりますが、なるべくながら避けずにお読みいただきたいな・・・とか思います。
無理して読む事は全くないですが。

『口にしたコトバには、魔力が宿るんだよ』

だから人を傷つけるような言葉を気軽に言つてはいけない、と。
まだまだ幼かつた頃、祖母が自分に言つてくれていたのを今更思い出した。

『今更』。

もつと早くに思い出していれば、何かが変わったかもしれない。
でも、何も変わらないんじやないかとも思う自分がいる。
結局、どうなつていたかなんて解らない事なんだ。
だって、もう結果は出てしまっているのだから。

もつとじつとサイロの田を変える事は、出来ない。

何回も繰り返した後悔と謝罪を心の中でひたすら繰り返しながら、
俺は手を離した。

『アイツ』と出会ったのは、約一年前の事。

高校で初めて迎えた、茹だる様な暑い日。

『アイツ』は俺のクラスに転入してきた。

『アイツ』は都会からやつてきた。

この言い方から解るように、俺の暮らす町・・・いや、村は、かなりの田舎だった。

人口は約2000人。スーパーもコンビニも一つしかなく、夜になれば明かりとなるのは月明かりだけ。

都會の人間からすると不便でしようがないように思えるが、どんな環境でも住めば都。

ましてこの地で生まれ育った俺にしてみれば、空気は澄んでるし、自然は豊かだし、静かだしと、文句のつけようがない村だった。

そんな村だから、都會から人がやつてくるなんてのは大変珍しい事で。

約20人ほどのクラス全体が、その噂でもちきりになった。

「なあ、どんな奴なのかな？」

この言葉が出ない日は無かつたと言つていいだろ？

念のため一応言つておくが、田舎とは言つても言語は標準語だ。

そして『アイツ』は来た。

俺はと云つと、都會からわざわざこんな辺境まで來るのだから、口クなやつぢゃないだろ？と思つていた。

どうせ何か問題を起こしたボンボンの子供か、はたまたいじめられっ子か。

何にせよ、まず普通の性格は望めないだろ？と思つていた。

けど、『アイツ』は予想を裏切つた。良い意味で。

髪は黒、ピアスも無し、制服もしつかり着こなし、かといつて近寄

り難いがり勉ではない。

端整な顔立ちからも、人の良さが滲み出ていた。

本人は見たところ普通。
ならば問題は家族関係か？

と、俺が考えられたのはそこまで。

突然先生に指名され、村の案内役を任せられた。
何故か。理由は簡単だ。『アイツ』の席が俺の隣だったから。

学校が終わって、俺は『アイツ』に村を案内して回った。
勿論無言で案内していた訳じゃなく、道中、取るに足らない雑談を
しながら歩いていた。

話してみて、俺の中での『アイツ』の株はますます上昇していった。
簡単にいえば聞き上手。でも、ただ聞いてるだけじゃなくてちゃんと
と話に参加している。

だんだん気分が良くなつていく自分を感じながら、日の暮れる頃に
案内は終わった。

「また明日」と、都會では見る事の出来ないだらう夕暮れを背に言

つた『アイツ』の姿は、今も鮮明に思い出せる。

男にこんな言葉は使わないのだろうが、夕暮れを背にはにかんだ笑顔がとても綺麗だった。

それから、俺と『アイツ』は一緒に過ごすようになった。
周りの人間が俺と『アイツ』の関係を言い表すとしたら、ほぼ全員
が『親友』と言つただろう。俺もそう思つていた。

そうしてしばらく過ごしていく内に解つた事が一つある。一つ目は、
『アイツ』に親がない事。

両親とも死別。母方の祖母がこの村に住んでいたらしく、それでここに越してきたという。

その祖母も今は容体が悪いらしく、大きな町の病院に入院している。
実質独り暮らしという事だそうだ。

これは全て本人から聞いた。

この話をしている時の『アイツ』は、えらく痛々しい顔で笑つていた。

「一つ曰は、『アイツ』の浮かべる笑顔が時たま「作り笑い」だという事。

先程の話に出た笑顔も、恐らくそれだ。
どうして解るのか？単純に言えば嘘っぽい。そんな笑顔だったからだ。

表面上こそ笑っているが、見れば声音や口元が本物のそれとは違う。

そんな笑顔を何度も見たある日、いつもなら一緒に帰るハズなのに一人で帰るものだからおかしく思つて後をつけてみた。

その時『アイツ』はいつもの帰り道から遠く離れた、村はずれにある崖つぶちに向かつていた。

崖つぶちといつても海岸にあるとかじやなく、単に崖があるだけ。その下には、大小様々な岩が転がつている。

こんな所で何を、と思つた時。俺は見た。

『アイツ』が泣いているのを。

崖つぶちに腰掛けて、何もない空を見つめてただ涙を流す。声を上げるわけでも、涙を拭うでもなく。

いつも学校で見る表情豊かな『アイツ』とは全然違つて、何だか見てはいけないものを見てしまつたようだつた。

いや、「ようだつた」ではないな。見てはいけなかつたんだ。わざわざこんな所に来るんだから、見られたくないものなんだろう。そつと、その場から離れた。

帰路につく際中、俺の心中はぐるぐる渦巻いていた。

こつこつことは触れない方が良いんだろう。けど、なんとかしてあげたいと思うのも確かで。

仮になんとかするにしても、何をどうしたら良いのか全く分からな

い。

きっと親だとかそういう事が関係しているんだろうけれど、どうするべきなのか。

それが全く分からぬ。

その次の日、俺はとにかく優しくしてやることにした。

泣くつて事は悲しいんだろ。だったらとにかく優しくしてやる。俺の粗末な思考じゃ一晩考えてもこれが限界だった。

『アイツ』は不思議がつてた。そりゃ、今までどついたり何だりしてきたから。

最終的には笑つて「ありがとう」だった。

あの時の笑顔は、作り笑いじゃない・・・ハズ。

今思えば、俺がしていたのは全部自己満足だったんだな。
こんなことで『アイツ』が救われたなんて、思えない。

だからって、何か代わりに出来たことは無かつたんだけれど。

ともかく、俺の中で『アイツ』は特別な位置を占めるようになった事は確かだ。

そんな状態で、俺の日常生活はゆっくり過ぎて行つた。

けどよくよく考えれば、「日常」なんていう言葉ほど脆いものはないんだろう。

人生何が起こるか解らない。

だからこそ人生で「日常」なんてありえないワケで。

その日、俺の日常は脆くも崩れ去った。

その日は雪の降る日だった。

もう少しで春を迎えるんじやないか、という季節。

俺は『アイツ』に呼ばれて、例の「崖っぷち」に行つた。

大切な話があるから、と。いつになく真剣な顔で、通学途中に言わ
れた。

今言えбаいいのに、と言いかけて留まつた。

今言いたくないから、崖っぷちに呼んだんだろう。ついでに人に聞
かれたくない話らしい。

クラスメートが近づいてきた途端、『アイツ』の顔はあの作り笑い
になっていた。

何だかその顔を見ていたくなくて、一人を置いて走り出した。『ア
イツ』が追つてくることは無かつた。

学校でも『アイツ』は作り笑いを浮かべていた。

そうでなければ、上の空でぼーっと黒板を見つめているか。

様子がおかしい。その一言に気がかる。

本当に何があったのか。気にはなったが、追求することはしなかった。

聞いたところで言つとは思えなかつたし、放課後になれば必ずと明らかになることだから。

放課後、まだ振りかけた程度しか積もっていない雪を踏みつけながら、俺は崖っぷちへと向かう。

傘は差していない。この程度の雪なら慣れっこだ。

ただ、いくら慣れているからといって寒いことに変わりはない。コートを羽織り、手袋もちゃんとつけてきた。

間もなく見えたのは、崖っぷちに佇む『アイツ』の姿だった。

崖に座り込み、足を力なく床に垂らしている。服も制服のままで、

「一トや手袋といった防寒具の類は見当たらなかつた。
さうじ、肩にはつすらと積もる雪。

その姿に驚いて声を上げながら走り寄ると、『アイツ』は力無く微笑んだ。

俺はこの時、どうすれば良かつたのか。今になつて必死に考
えるけれど答えは出ない。
答えが出たところで、もう俺に出来ることは後悔する事しかないの
だけれど。

俺が何か話しかけても、『アイツ』は返事を返さなかつた。
ただニコニコと笑つているだけ。いや、笑つているのかも解らない。
表情は確かに笑つているのだけれども。

その表情が何だかイライラしてきて、声をかけようとした時。

『アイツ』は言つた。

絶対に言つてはならない、禁じられたコトバを。

好きだ、と。

続けて何かを言つていたが、俺の耳には入つてなかつた。

時間が経つた今でも、これは正直に言える。虫睡が走つた。

そもそも、俺は同性だ。それを恋愛対象とするなんて・・・俺の常識ではありえなかつた。

更に言えば、親友だと思っていた奴にそんな事を言われたのが一番大きなショックだった。

ヤメロ、ヤメテクレ。

そんなコトバ言わないでクレ。

俺達、トモダチだろ？

そんな言葉が、俺の口から出る。けれど、それは音にならなかつた。何かを喋りうとしても、ひゅーひゅーと吐息が出るだけ。

そんな自分を落ち着かせようと、必死になつて息の仕方を思い出した。

ゆっくり深呼吸して、なんとか喋れる状態になつたと思つたところで、『アイツ』の話は終わつた。
中身は、一切覚えていない。

喋り終えた『アイツ』は俯いたままだつた。
見えないけれど、きっと笑つているのだろう。
内心泣きたい気持ちで、笑つていいのだろう。・・・そう考えたら、心の何かが外れた。

「・・・ふざけんな」

覚えているのはそのコトバだけだつた。

ただ解るのは、それから矢継ぎ早に罵声を浴びせた事。
そして、最後に言つたコトバ。

「お前なんか、死んじまえ！」

これだけは取り消したい。

今更そんな事は出来ないのだけれど、本当に取り消したい。
俺の事を好きだと言つた『アイツ』に多少なりとも嫌悪感を覚えた
のは事実だけれど、死ねばいいなんて思つてない。

あまりの事に、思考が正常じゃなかつただけなんだ。

後悔の一言を言い放つて、俺は駆け出した。

とにかく、どこかへ行きたかった。『アイツ』がいない場所へ。

『アイツ』は追つてくる事はしなかつた。その時俺は自分に手一杯
で、何で『アイツ』が追つて来ないかなんて考えもしなかつた。

その日、俺の覚えているのはこの辺までだ。

次に覚えているのは、自室で迎えた朝日だけだつた。

結露した窓越しに見る朝日は、キラキラ輝いていてとても綺麗だつ
た。

・・・昨日の出来事が、まるで嘘のようだ。

制服の袖に腕を通しながら、昨日のあれは夢だつたんだと、しちう
もない自己暗示をかけていた。

あんな出来事は全部なくて、今日も今までの日常を送るんだと。
定時になれば『アイツ』がいつもみたく迎えに来て、談笑しながら
学校へ歩いて。

本当にくだらない話題で盛り上がり。・・・そんな日常が、巡る

んだと。

でも、『アイツ』は迎えに来なかつた。
それどころか、学校にさえ来なかつた。
その日だけじやない、次の日も、その次も、そのまた次も。
担任が家を訪ねても、誰もいないうしに。

『アイツ』が、いなくなつた。

わづ、この時点では日常は消え去つていた。跡形も無く。
もづサイコロは振られてしまつたのだ。何をどつ足搔いても、目が
出るのを止める手段はない。
出る皿は全て、・・・非常。

警察に通報され、村を挙げての大がかりな捜索が行われた。

結果、あの崖からそう遠くない山中で、『アイツ』は見つかったそうだ。

死体で。

腹部を滅多刺しにされ、出血多量死。犯人は、現在逃亡中の麻薬中毒者。

その犯人も、そう離れていない場所でみつかった。同じく死体で。こちらは、出刃包丁で自らの喉を切り裂き、自害。

『アイツ』が刺されたのも、同一の凶器だったそうだ。

犯人は相当の中毒症状がでていたらしく、幻覚を見て『アイツ』を刺し、錯乱のまま自分の喉を切り裂いた。

警察はそういう筋書きを作り上げたそうだ。

発見したのは、俺。

一言で言えば、真っ赤。

まだ残っている雪に、『アイツ』の血が沢山染み出で。なのに、『アイツ』は笑つてて。

何で笑つていられるんだよ。

何でそんな事になつてるんだよ。

俺はその場に座り込んで、そんな事をずっと呟いていた。警察の人に連れて行かれるまで。

また、記憶が飛んで。

次に見たのは病院の天井だった。

病院とは言つものの、この小さな村にそんなものはない。
今にも潰れそうなオンボロ小屋の診療所。

目を覚まして、飛び込んできたのは天井。
廊下に繋がる部分はカーテンで仕切られており（壁やドアはない）、
反対側の壁には窓。残りは壁。
窓からは温かい日差しが差し込んでいる。

・・・ そうだ、温かい。温かいなんて変じゃないか。
だってあの時季節は冬で、雪だつてまだ

そこまで考えて一つの可能性に至つた俺は、慌てて窓に駆け寄る。
体は問題なく動くようだった。

窓の外には、緑が溢れていた。

青々しく葉を広げる樹木、そこいら一帯に咲き誇る花、その周囲を舞う蝶。

誰がどう見たって、これは春だ。少なくとも冬じゃない。

「お田覚めかい？」

カーテンがシャッと開けられ、先生が入ってくる。
先生と言つても学校のではなく、診療所の。

色々吃驚して固まっている俺に、先生は説明してくれた。

まず、あの後　　俺が『アイツ』を見つけた後　　俺は意識が
なかつたらしい。

都會の病院に連れて行かれたらしく、そこでの診察結果は「ショックが大きかった為」だそうだ。

普通に考えたらそうなるだろう。

・・・今だつて、思いだそつとすれば鮮明に蘇る。

『アイツ』の着ていた学生服の腹部はズタズタにされ、そこからほ夥しい程の血が流れ出でてい。

さらに血は、もう今は無いであろう真っ白な雪を真紅に染めた。

そんな事を思い出したもんだから、少し気分が悪くなつてよろけた。

先生に支えられながら、俺はそれからの事を聞くことになった。

先生の言つていた事を要約すると、俺は今まで つまり四月まで目が覚めず、つい先日病院から診療所へと移されたそうだ。平然と言つてるけれど、実際のショックは結構大きかった。

ついでに言えば、もう事件のカタはついているので取り調べ等も特にないそうだ。
誰かしら訪ねてくるかもしれないが、とも付け加えられたが。

そこまで先生が話した所で、俺の親とか兄弟が来た。

いつも怒鳴つてばつかの父さんや母さんが目に涙を溜めていて、何だか妙な気分だった。

それから一週間。

俺は無事に学校に通えるようになつていたが、現在地は教室じゃない。

俗に言うサボリといつやつだ。元々頭の良い方じやない俺が数ヶ月授業を受けない・・・つまり、出席しても何が何だか。

大体おとなしく席でじっとしているなんて出来ない。

・・・あの時の映像が、記憶に深くこびりついてしまつていて。体を動かして忘れようとしないと、怖くて怖くて仕方なかつた。

怖かつた。

でも、足は自然とあの場所へ向かつていつた。

以前、『アイツ』がそうしていたように座つてみる。
ちょっと怖い気もするけど、慣れれば怖い事は無い。景色は良いし。

ここは、あの崖っぷち。

何のあてもなくここに来て、何の目的もなくここに座り込んでいる。かつて『アイツ』がしていたようにしてみても、あの時『アイツ』が何を思っていたのかは解らなかつた。

何のあてもないと言つたけれど、どうしてここに向かつたのかは分からぬくもない。

知りたかった。『アイツ』がかつて何を思つたのか。

俺自身聞いて驚いた事だけれど、冬のあの日、『アイツ』は『独り』だつたんだそうだ。

入院していた祖母さんの容体が急変、そしてそのまま。

天涯孤獨。

あの日の前日の事だつたらしい。

教えてくれたのは警察の人。

家族や友達たちは、誰も教えてはくれなかつた。

『もう忘れなさい』

教えてくれなかつた事を問い合わせたら、酷く悲しい声でそう言われた。

その悲しみは何からきている物なのか・・・生まれてからずっと一緒に暮らしていた人の言葉でも、俺にはもう解らなかつた。

『好きだ』と。

そう言った『アイツ』の真意はどこにあつたんだろう。
言葉通りの意味なのか、それとも。
独りが寂しくて、ただ俺に頼りたかつただけなのか。

勿論そんなの俺の予想の内の一つ。でも完全否定はできない。

そして、もしさうだとしたら・・・俺はどんな事も言つてしまつたんじやないのか。

暴言の数々は言つまでも無し、極めつけは『死んじまえ』。

『口にしたコトバには、魔力が宿るんだよ』

祖母の言つていた事は正しいのかも知れない。

俺が言つたから死んだ訳じやないけど、もしかしたら言わなければ死ななかつたかもしれない。

疎遠になるくらいですんだかもしれない。

もつと上手く『アイツ』の気持ちを汲んでやつて、上手い言葉をかけられたら、今も隣にいたのかもしれない。

そう、全部「かもしだれない」。今となつてはどう足掻いても「なりえない」。

でも「なりえる」可能性はあつた。
確かに、あつた。

俺が悠長に考え事をしていられたのは、それまでだった。

突然の衝撃。耳を貫くよつた地響き。

地震。

俺がいるのは崖っぷち。

どうなつてしまふかなんて、想像に難くなかった。

『やばい』。

大抵そう思つた時には、もう手遅れなんだ。

地震で足場が崩れた。

俺はぎりぎり淵につかまつてぶら下がつているけれど、長くは持たないだろ？。

もし、あの時祖母の言葉を思い出していたなら。
もし、あの時俺がもつと思慮深い行動をとれたなら。
もし、あの時俺が死ねなどと言わなければ。

世界は、少しだけ変わっていたかもしれない。
『アイツ』が、いたかもしれない。

俺が直接手を下した訳じゃない。

でも、俺があんな事を言わなければ『アイツ』は死ぬ事なんて無かつたはずだ。

俺が冷たく突き放したから、『アイツ』は犯人に出会ってしまった。

今更だけど、本当に『ごめん。

本当に・・・

「『ごめんな

俺は手を離した。

落ちれば確実に死ぬ。

死にたくないんじゃない。生きていたい。

怖い。

何で『アイツ』は笑っていたんだろうか。

あの世で会えたなら、教えてくれよ。

{ End }

(後書き)

初めまして。作者の空と申します。

初投稿させていただきましたが、いかがでしょうか？

この作品には二つテーマがあります。

一つはタイトルにもなってる「言葉」。

もう一つは「同性愛」。

後者については、自分はなんとも言えません。

自分がそういう人に好きだとか言われるのはさらさら御免ですが、

同性愛自体は別にあつてもいいんじゃないかな、と思います。

どこかの国では法律で同性婚が認可されてたりしますからね。大体同じ人間じゃないです。

愛するという事は素晴らしい事だと思いますよ、多分ね。

前者については、言葉っていうのは発した人の意図に関わらず相手に何かしら影響を与えますよ・・・的な事を聞いたかつた訳です。近頃の若者は「死ね」とか「きもい」とか平気で口にしますけど、何考えて生きてんでしょうね。

本人はふざけたノリで言つただけかも知れませんが、言われた側の気持ち、考えてますか？

特にメールです。メール。

文面だけだと相手の感情が解りづらいですからね。
もしかしたら、アナタの何氣ない言葉で傷ついてる人がいるかもし
れませんよ？

長くなりましたが、この辺繰ねてていただきまく。
閲覧ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0926j/>

コトバノ魔力

2011年1月28日01時50分発行